

校内 ICT 活用研修の効果的な在り方を探る

ー持続可能な活用をめざしてー

鳥取県教育センター情報教育課 研修主事 岩崎 有朋

キーワード：持続可能な体制づくり、わかりにくさの体験、協働型授業の体験

1. はじめに

高知県の町立伊野南小学校より、夏季休業中の職員研修として電子黒板を活用した研修の講師の依頼があった。伊野南小学校と隣接する伊野南中学校は平成21年度電子黒板の調査研究校として全教室に電子黒板がある学校である。導入年度から職員も入れ替わり、活用レベルの差を解消することも含めて、小中合同の研修会を行うことになった。

本事例は、筆者が関わらせていただいた両校の合同研修会の内容及び効果の報告である。

2. 研修のねらい

この研修のねらいは大きく2つ。1) 教員のICTスキルレベルの向上と、2) 持続可能な学び合う教員集団づくりである。

まず、1) についてだが、教員がICTを活用できる場合、学習場面においてICTを「活用する」・「活用しない」の選択ができる。しかし、活用できない場合、一面だけの指導方法に学習者は合わせるしかない。

とある学校で、教員が資料をかざしながら、「後ろの人には見えにくいかもしれないけど・・・」と説明する場面があった。しかも、プロジェクタが天井に常設の教室にも関わらず・・・。

「活用する」・「活用しない」の選択ができる場合、場面に応じて学習者の困り感を予測し、それに対応した指導の準備が可能となる。また、授業中に生じたイレギュラーな困り感に対しても、ICTを活用して別の方法で指導できることもあるだろう。

伊野南小・中学校の教室環境は書画カメラ付きの電子黒板が教室ごとに配備され、恵まれた環境にある。だからこそ、「いつでも」、「すぐに」、「簡単に」のキーワードで学習者の困り感に寄り添い、それを解決するためのICT活用スキルの『全員習得』を目指した。

次に、2) については、スキル習得以上に重要だと考えている。なぜなら、研修がゴールではなく、逆にスタートだからである。研修時には講師に質問することができるし、参加者同士も研修時だけは、他の業務から離れ、同じ内容について集中することができる。しかし、研修終了後、日常に戻ったとたん、互いの業務の忙しさに、質問することもはばかれることも出てくるであろう。そうこうしているうちに、活用に向けての意欲も減衰し、研修前の状態に戻ってしまう。

それでは互いの時間を使って研修をする意味はなく、その先にいる児童生徒に授業改善の恩恵が届かなくな

ってしまう。研修を機会として、互いに聞き合える人間関係性を高め、普段の人間関係の幅を広げることが、持続性へとつながると考えている。

3. 研修の内容

上記のようなねらいをもとに、合同研修会を大きく3つのプログラムで構成した。①即効性・汎用性のあるICTスキル、②わかりにくさの体験、③協働型授業にむけての3つである。

まず①については、デジカメを電子黒板に直結して映したり、プレゼンテーションソフトのスライド自動切り替えを利用してカルタの問題提示をしたりと、すぐに出来るもの、教科を越えて汎用性のあるスキルをいくつか組み込んだ。

この演習の大切なポイントは、必ず自分でやってみるということと、全員ができるようになるということである。チェックカードを用意し、できたかどうかグループ内で相互チェックをしてもらった。

次に②については、伝えたつもり、分かせたつもりにならないように、子どもの立場で「分かりにくい」

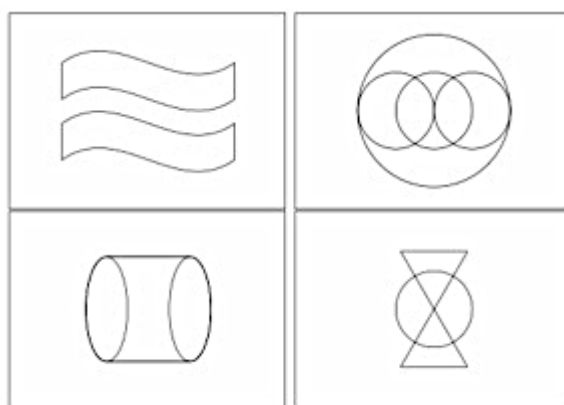


図1 口頭伝達図形の例

もどかしさを体験してもらった。その1つは、簡単な図形を口頭のみで伝えるということ。シンプルな演習で、図形の1つ(図1)を2分以内に口頭のみで伝え、聞いた人はそれを図形に表すだけである。また、ある活動の手順のみの文章を提示し、読めるが何についての話かわからなかったり、錯視が起きる図形を提示し、映っているものがわからないもどかしさなど、分かりづらい子どもの気持ちになってもらった。

そして最後の③は、解き方がいくつか考えられる課題に対し、「あーでもない、こーでもない」議論の中で「分かった!」を引き出す演習を組み込んだ。この演

習では、電子黒板上で、自由にオブジェクトが動かせるようにしておき、解き方を可視化できる工夫をした。このコンテンツを使い、分かった人がオブジェクトを動かしながら説明し、それを聞いて分かった人がさらに周りの人に伝えることでグループ全員が理解できるように進めてもらった。(写真1)



写真1 コンテンツを使って説明

4. 研修の結果

3時間の研修の参加者は27名（小学校16名、中学校11名）であった。研修後、2ヶ月ほどして、いくつかの項目についてアンケートにご協力いただいた。

○教員のICT活用授業「ほとんど活用できない」

研修前15% → 研修後8%

○児童生徒のICT活用授業「ほとんど活用なし」

研修前27% → 研修後12%

○「気づきが大いにあった」、「少しあった」

肯定的回答100%

○「職員連携のきっかけとなった」

大いにあったという回答85%

○自由記述の感想

- ・集団の協力の大切さ
- ・失敗しても背中で見せる教員の姿勢
- ・遠慮せず聞いてみようという雰囲気
- ・小中一緒に子どもを育てる意識
- ・他の先生の発想の豊かさに気づいた
- ・子どもの視点で授業を見つめ直す

5. 研修における配慮点

(1) グループ分け

今回は3つのミックスを意識してグループ編成をお願いした。3つのミックスとは、男女比、若手とベテラン、小・中学校スタッフである。普段関わりが弱い部分に刺激を与えるためにも、グループ分けは、事前に仕込むことができる仕掛けの1つである。

(2) 遠慮の壁を壊す

研修の最初はぎこちなさが残るが、それを一気に解消するために、①のICTのスキルチェックで無理矢理互いに関わる場面、「全員ができる」、「相互にチェックする」という設定をした。このことで、自然に会話が生まれた。また、②の分かりにくさの体験では、どうして分かりにくかったのか、グループ内で議論を深める時間を設け、児童生徒の立場での経験を踏まえながら、互いに距離感を縮めることができた。

(3) 傍観者をなくすための目標設定

操作に自信がない人は、どうしても後ろから見ていることが多い。先程も述べたが、「全員が課題を必ずクリアすること」という条件をつけるだけで、グループの動きが変わる。目標設定を細かくし、それをグループ全員が達成できることで次にすすむ形をとった。そうすることで、できない人は積極的に質問をするようになり、分かる人は献身的に関わろうとする姿が多く見られた。また、クリアするごとに拍手が自然と起こり、温かい雰囲気での研修がすすんだ。

(4) コーヒーブレイクの設定

研修中の小休憩にお茶やチョコレートなどを用意してもらった。これは校内研修だからこその仕掛けである。ホッとした時に本音が出るので、あえてこの時間を取った。雑談の中にも、気づきや質問などが交わされていたようである。

(5) 児童生徒の姿とだぶらせる

研修中、分かりにくさの体験の場面では、伝わった、伝わらなかったと大いに盛り上がったが、「この分かりにくさと同じことを子ども達は普段感じているのかもしれないですね。」と投げかけると、会場は静かになった。伝えたつもり、分からせたつもりになっていないか、振り返る大切な機会としたかったからである。

研修を受けている先生方は、学ぶという点では児童の立場を体験中といえる。大切なことは、その体験と、教員の視点で体験を振り返り、自分の指導と重ね合わせ、改善策を考えることである。

6. さいごに

伊野南小・中学校の先生方は、ユーモアもある一方、爆発的な集中力もあり、研修が進めやすかった。この背景には、管理職の強い志、主幹教諭のリーダーシップとフォロー、そして職員間の「和」が、温かい雰囲気が大きく作用していると思う。

校内でICT活用を推進するためには、機能を使いこなすスキル以上に、人と人の関わりがどれだけ深くなるかにかかっていると、この合同研修会で改めて教えていただいた。